

千葉縣安房郡稻都村・國府村の斷層

上 治 寅 次 郎

一、緒言 千葉縣安房郡稻都村國府村の斷層は、昨年九月の關東大地震に起因せるもので、東

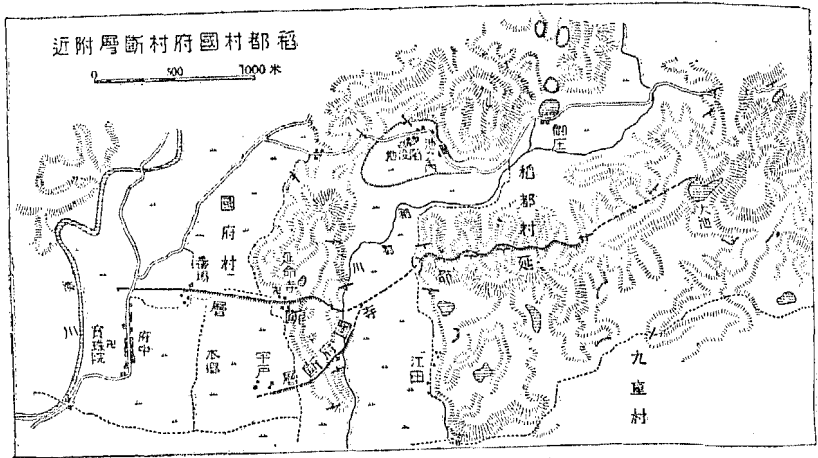
西約四軒、落差の大なる處二米に近く、水平の喰違ひ一米以上に及ぶ處もあつて、三浦半島下北浦村の斷層(地學雜誌第三十五年々第四百十八號)よりも、更に、大規模なるものである。勿論、本誌第一卷第六號に於て小川博士の論述せられた相模灣内の大地變には比すべくもないが、吾人の踏査せる範圍に於ける最大地變であつて、恐くは、關東大地震によつて生せる龜裂、斷層中、吾人の目撃し得るものゝ中で、最も顯著なものと思はれる。この斷層は南北二條あつて、北方の斷層は、稻都・國府兩村に渡り、名刹延命寺の南を過ぐるを以て、今、之を延命寺斷層と稱し、南方の斷層は主として國府村にあり、斜に北方の斷層と合するを以て、之を國府斷層と稱する。この兩斷層の北、稻都村には數ヶ所に大小の陥沒地帯があり、東南には房總地方に於ける最大隆起(陸地測量部調査一、八三米)と稱せらるゝ九重村がある。この附近一帶、震害激甚であつたことは、安房郡役所の調査に係る全住家に對する全壞、半壞住家の百分比が國府村九四%、稻都村八一%、九重村九三%

館野村九六%、健田村九五%、那古町九八%、船形町九三%、北條町九六%、館山町九九%であるを見て知られる。

二、延命寺斷層

國府村府中寶珠院(本誌第一卷第四・五號口繪參照)の北三百米の地から起つて、南八十度東に一直線に水田を横切り、延命寺丘陵に及び、この間延長約一軒である。初めは僅に南と東に向つた窪みを示すのみであるが、大字本織番場に至れば宅地に龜裂を生じ、部落の東では龜裂の幅員、南北二十米、階段状に中央に向つて陥没し、低所には龜裂に添ひて延びたる長方形の池沼を生じてゐる。池沼の最深部は約〇・五米で、龜裂の中央部よりも甚しく北に偏倚し、北側には美しき斷層崖を生じ、池の最深部より約一米と推測された。(第一圖)南測にも小なる斷崖を生じてゐるが、不明瞭に東に斷續し、北側の斷層崖は東するにつれて稍高く、極めて明瞭に一直線なして延命寺の南に及ぶ。龜裂の幅員は東するにつれて狭く、延命寺の西南にて僅に五米となり、龜裂内の池沼は番場以東に五個を認めたと、東するにつれて小さくなり、延命寺の西南にては僅に湿地をなすのみであつた。

延命寺丘陵は八十米を最高とし、概して五十米内外の臺地をなして南北に延びるもので、第三紀凝灰質頁岩及砂岩よりなり、南方は走向北七十度東、傾斜西北に四十度、中央部では走向北七十度東、傾斜東南に六十度、北部は西北の走向で西南に四十度の傾斜を示してゐる。中央部には、



千葉縣安房郡稻都村國府村の斷層

Limopsis sp. *Dentatum* sp. 其他二枚貝類の化石の産地がある。

斷層は延命寺の南より北七十度東の方向をとりて、山頂約五十米内外の地點に達し、それより南六十度東に轉じて丘陵を横斷し、東麓の稻都川に及ぶ。丘陵西側中腹の竹林・松林・水田のある附近では龜裂の幅員三米以内、南側の低下〇・七五米乃至一・九米、龜裂の深さ二米であるがこの附近で著しきは水平の喰違ひが明瞭に認められることで、切斷された田の畔及小徑によつて測定した處では〇・九米乃至一・二米で、南側が東(或は東南)に移動したものと推定される。丘陵の東斜面に於ては龜裂は著しく其の勢力が衰へる。

稻都川以東は水田であつて約六百五十米は殆んど異常を認めぬが、稻都村の南方の丘陵地に至ると、再び大龜裂を認める。この丘陵は主として第三紀凝灰岩質頁岩及細粒砂岩によりて構成せられ、走向は西方に於てはほぼ東西、南に四十度の傾斜を示し、東するにつれて稍、東北に近き走向となり、

大池の西方に於ては全く東北の走向をとり、三四十度東南に傾斜する。丘陵は高さ六十米内外で、山背は走向と一致の方向をとり、概して南方は緩斜し、北方は急斜する。北方にはスパーが相並んで特殊な地貌を呈してゐる。斷層は初め丘陵の西端に崖崩を生じてあらはれ、崖下には道路及水田の一部に南四十度東の龜裂を見る。これより以東は、山地にては北に彎曲し、谷地に於ては南に彎曲し、ジグザグの形を描きつゝ、山脊の北側を東に進むこと約一・一軒に及ぶ。この間は松林・雑木林・田畑・宅地の別なく龜裂・斷層を生じ、常に南方低下〇・五米乃至一・五米に及び、水田には深さ六米に及ぶ水溜を生せる處もあつた。地層の走向が東北に變ずるにつれて龜裂は勢力衰へ、大池附近に於ては、僅に北岸近く小規模の崩壊を見る外異常を認めざるに至る。

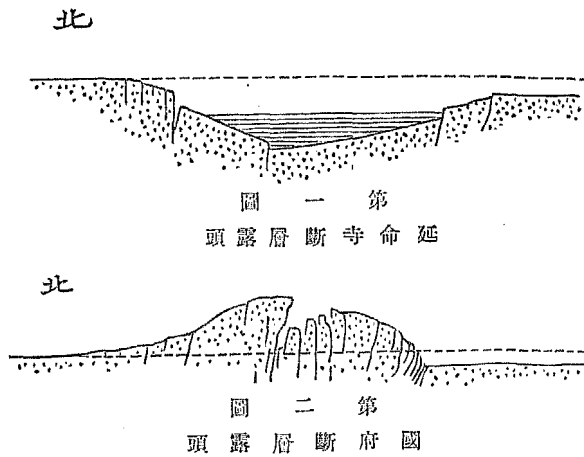
以上延命寺斷層の注意すべき特徴は第一、概して南側の低下すること、第二、地層の走向と斷層の走向と一致するときは龜裂が偉大であること、これは特に稻都村南方の丘陵に於て明瞭である。

第三、稻都村南方丘陵に於ては凝灰岩質頁岩(走向東西、傾斜南に四十度)の傾斜の面に之り面を生じ Gliding 又は Strike fault なることを推定せしめること、第四、番場部落の東部より龜裂斷層の明瞭となること、及び延命寺丘陵の西斜面に於て水平移動最も顯著なること、第五、斷層は東西に走り(延長約四軒)斷層面は傾斜急ならざること(大抵地層の傾斜と一致し約四十度以下)。

三、國府斷層

延命寺斷層の南約五百四十米、國府村大字本織宇戸の東南から明瞭に認められ

北七十度東に約二百二十米の間、一直線に水田を横断し、延命寺丘陵の南に及ぶもので、延命寺斷層に比し小規模で幅三米乃至四米であるが、恰も、鼯鼠の通つたあとの如く、所謂 *hole track* 状に一・五



第一圖 延命寺斷層露頭

第二圖 府斷層露頭

田に於ては百十米許りの間、北二十五度東の方向に斷層を認め、斷崖をなし南東は北西よりも一米低下する處もあつた。夫より後は不明瞭な凹地を追跡して延命寺斷層に合一するものと推察される。

千葉縣安房郡稻都村國府村の斷層

米内外もち上れるとは最も著しい差違である。(第二圖)形の上では南方低下の如く見ゆるのであるが、斷層の北方は比較的廣きに渡つて田地に凹凸を生じ、南方は斷層を境として殆ど變動なく、もち上がれる部分は北は緩に漸次に南に高まり、南は急に崩れかゝれるのであつて、恰も北又は北西より壓を受けたかの如く思はれ、南方低下の事實を疑はしめた。次に丘陵地にては北五十度東に向つて松林を横断し約三百三十米にして稻都川に及ぶ。川の西方、丘陵の東麓の傾斜地を利用して建てられた一農家は住宅は幸に無事であつたが、物置小屋は龜裂上にあつて全壞し、其敷地は東南(或は東か)に約一米位押し出された事實を明瞭に觀察し得た。稻都川以東の水

房州國府村大字本絰番場より東方を望めるもので延命寺斷層の一部を示し斷層は前方の第三紀丘陵



を横斷して更に東に續く。寫眞の右上の池は龜裂の凹所に生じたのである。

延 命 寺 斷 層

國府斷層につきて注意すべきは第一、斷層の部は陥没せずともち上ること、これは延命寺斷層との著しい差である。第二、斷層の明瞭となるは宇戸部落の東南で、延命寺斷層の明瞭となりし番場部落の南四十度東に當り、水平移動の極めて明かなる丘陵の東麓は延命寺斷層に於て同じく水平移動の明かに認められた地點の南四十度東に當ること、第三、南方低下の事實不明瞭なること、第四、國府斷層は概して北東より南西に一籽の延長を有し、延命寺斷層に比して小規模にして前者に附隨して起れるものなるべきこと等である。

四、稻都陷沒地

稻都村に於ては大震當時大小の

龜裂崩壞は殆んど全村に渡り、主要なる陷沒地の面積十二町歩に及んだ。村役場の調査によれば耕廢地となりし田地二十三町歩に及ぶ。其の中主要なる陷沒地は大宇池之内附近、大宇御庄北方、大宇山名北方等で、池

之内にては長軸を東微北に有する橢圓に近き三角形を有して周邊より漸次階段狀をなして陥没し、最深部は陥没地の北縁であつて約三米に達し、附近一帶は沼澤と化してゐる。池之内、御庄、山内等の諸陥没地は何れも沖積地と第三紀層との相接する地に生せるは注意すべき點と思はれる。

五、結論

安房國に於ては船形町より東方丸山川下流に至る線と、北條町より東方瀬戸川下流に至る線との間は極めて低平で、丘陵地と雖も大抵六十米乃至八十米に過ぎぬ。然るにこの低地帯の北及南は急に百米以上の臺地となる。稻都、國府兩村の斷層はこの低地と臺地との境界に接して東西に走るもので、之を西に追跡すれば那古觀音堂附近の崩壞、大房岬の大崩壞があり、之を東に延長せば點々たる山崩、崖崩を連ねて、南三原村シラスカ白渚北方の山崩がある。この間の延長約二十軒。更に低地の南に於ては南方臺地との境界に接して千倉・長田・高の島、濱田の諸鑛泉は東西に連り千倉の外は大震の結果新に湧出又は増量したもので、長田の如き本年一月の地震に更に増量した。以上、安房國を東西に横斷する南北二構造線は極めて注意すべきものであつて、濱田海岸、北條北東の斷層蕪礫は明かに地質時代に於ける地變を物語り、今次の地震による斷層・陥没・崩壞・鑛泉湧出及び大震害は構造線の活動性を示すものでその活動は今後に於ても豫想し得る處であつて、若し將來房州附近に地震の起ることありとせばこの構造線は必ず活動を見るべく、房總の地震とこれ等の構造線とは極めて緊密なる關係を有するものと推察される。